

# 「津軽鉄道で結ぶまちづくり」

担当教員名 西城戸誠・辻英史・田中勉

## コース概要

日程	2016年2月18日～21日、 2016年3月12日～15日
場所	青森県五所川原市、中泊町、つがる市
参加人数	2月21名（1名早退）、3月20名

## コースのねらい

赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動や、コミュニティカフェの実践を学び、着地型観光、地域活性化のあり方を学びます。

## 内容

コースの狙い：本フィールドスタディは、赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動を見学しながら、奥津軽地方の「着地型観光」について考えていきます。着地型観光とは、従来型の発地型観光とは異なり、着地側が受け入れやすい観光を通じて観光地の人々と観光客の間によりコミュニケーションが生まれるような地域密着の観光のことです。企業組合・でるそーれの皆さんが運営しているコミュニティカフェの実践を始め、津軽鉄道沿線の地域づくり、まちづくりの実践を学ぶとともに、このフィールドスタディの実践によって、地域のまちづくりの実践をつなぎ合わせるという意味も込められています。したがって、本フィールドスタディは、訪問先から「学ぶ」という側面—上記の着地型観光やまちづくりに関すること以外に、「ふるさと」とは何か、「地域」で生きていくとはどういうことかなど—と、私たち自身が「地域にかかわる」ということがどういう意味を持つのかという点を再帰的に捉えることを企図しています。

\*行程について（2月と3月では若干異なる点もありますが、ほぼ同じ行程です）

1日目：五所川原駅近くのコミュニティカフェ「でる・そーれ」に集合し、オリエンテーションを受け、五所川原の街歩きをした後、五所川原市の夏を彩る立佞武多の展示がある、「立佞武多の館」を訪問しました。また、立佞武多を復活させ、その後、津軽鉄道にも勤務した、菊池忠さん（立佞武多の館館長）から「立佞武多と津鉄とわたし」と題した話を伺い、立佞武多と津軽鉄道、五所川原という地域との関係について学びました。続いて、コミュニティカフェでるそーれの代表である澁谷尚子さんから「場としてのコミュニティカフェを考える」という講演をしていただき、このフィールドスタディのコンセプトである「津軽鉄道で結ぶまちづくり」について、でる・そーれの実践から学ぶことができました。なお、初日の宿泊はグループに分かれて、農家民泊をしました。地域の方といろいろな話をして、世代を超えた交流を行いました。

2日目：農家民泊先から集合し、昨晚の出来事のふりかえりを行った後、津軽鉄道のストーブ列車（列車の中のだるまストーブにスルメイカを焼いてくれます。津軽鉄道の冬の観光の目玉です）に乗り、津軽五所川原駅から金木駅まで移動しました。地域のまちづくり団体NPO法人かなぎ元気倶楽部の話や、太宰治の生家である斜陽館や、新座敷を訪問し、太宰治を巡った観光の「質」の違いについて学びました。夜はでる・そーれで交流会を開き、親交を深めました。

3日目：中泊町の「イネ子の畑」でアスパラガスの収穫体験をしながら、佐藤イネ子さんの話を伺いました。アスパラガスと津軽鉄道との繋がり、冬のアスパラガス栽培を廃油を用いたボイラーによって行い、小学校の給食や家庭から出た廃油を使ってそれが小学生が持つてくることで環境教育の場にもなっていることなど、さまざまな話を伺いました。午後は、「持続可能な津軽鉄道と地域の未来」と題した講演を、津軽鉄道(株)社長の澤田さん、津軽鉄道サポーターズクラブ会長の高瀬さん、中泊町のまちづくり団体・起きて夢見る会の夏原さんにしていただきました。その後、

これまでのフィールドスタディの振り返りとして、「都市と地方をつなぐーフィールドスタディの意義」というテーマで、グループ別のワークショップを実施し、地元の方の前で発表会を行いました。なお、夕食は中泊町のグリーンツーリズム団体「かけはし」の方をお願いをし、学生たちも少しだけ夕食づくりを手伝いました。

4日目：「かけはし」の方が作ってくれた朝食を頂いた後、つがる市フィルムコミッションの川嶋大史さんに、地元を舞台とした映画づくりについて話を伺い、自分の「ふるさと」とは何かという点を考えるきっかけをいただきました。最後にでる・そーれで全体のまとめをしました。

事後学習会では、フィールドスタディ全体の振り返りを行い、今後の人間環境学部での学びとの関連について議論をしました。

## 学習を終えて

私は昨年と今年二度、奥津軽F Sに参加させていただきました。今年奥津軽を訪れて思ったことは、二度訪れなければわからないことが沢山あるということです。斜陽館の方のお話の内容や、でる・そーれの商品棚の品ぞろえなど、たったの一年で変化していた点がいくつもありました。これらの変化に気づけるのは、二度行った人の特権だと思います。一方、変わらないものもありました。奥津軽の方々の温かさです。昨年訪れたことを皆が覚えてくださり、顔だけでなく名前まで呼んで歓迎していただきました。この奥津軽F Sは、毎年変化を重ね年ごとに良さが増していく、また何度も訪れることにより魅力に気付ける、そんなF Sだと思います。(2月参加・野口レシチア香織(3年))

私は、奥津軽F Sに参加し、「地域を考える」ことができたと思います。様々な場所にいき、刺激的な人たちと出会うことで、“なぜこの人たちがこの地域にいて、なぜこの地でこのような仕事をしているのか”を深く考えさせられました。「地域と人を結びつけているものは何か」を実際に体験し、都市目線からではなく、地元の人と一緒に考えていく機会を持てたことは自分にとって貴重な体験となりました。終わった後に、テーマ、お題に対して、必ず全員が答えを持ち、考えさせられる中身の濃いF Sであったと思います(3月参加・金井将輝(3年))。

